4　自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・すべての家庭が回答しており、適切である。
・各観点において、取組内容、達成状況、改善の方向性について、連動しており適切だ。保護者アンケートの評価や意見についても、対応している。
・教職員アンケートでは、個々での評価の開きが大きいと感じる。評価の観点をさらに明確にすることが重要だ。
・アンケートでは、先生がA、保護者がBという観点が多いが、去年よりその差が縮まっている。本校の教育活動についての保護者からの理解を徐々に得ていると考えられ、保護者の理解を深める情報発信、密な情報共有への取組を継続してほしい。
・昨年度より評価アンケートをデジタル（オンライン）で実施している。保護者の意見も増えており、保護者はPC対応できている。今後もネット利用でのアンケート集約を続けていくとよい。
・アンケートの数字だけにとらわれず、教育活動の実践や保護者意見を大事に取組につなげてほしい。
・会議においては、特に課題だと思うところを、太字にするという整理の仕方もよい。評価につなげやすい。

5　評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価

学校自己評価の8観点についての自己評価結果は概ね適切である。
・ホームページや学校通信「輝き」、小学部通信「のびっこ」、中学部通信「みちしるべ」など、学校からの情報発信にも力を入れて取り組んでおり、保護者や地域、関係機関にも理解を得ている。
・今年度は、コロナウイルス感染症も5類となり、多くの学校行事や交流が実施できている。今後も保護者・関係機関等と情報共有に努め、次年度以降につなげてほしい。
・成果と課題をより具体的に整理し、今後の工夫や改善に努めてほしい。
・多くの観点で教員の努力がみえる。特に、実際の体験をさせようという視点はよい。今後も継続してほしい。

（1）児童生徒理解
・Aをつけた保護者が教員の割合よりも少ないので、今年度のお話会等の取組はとても大切だ。これを、続ければ、保護者との連携も密になると考える。話しやすい環境で、将来のことを考えて、連携すること大事だ。
・保護者との連携と教職員間での連携、両方が大切だ。意見交換をしっかりと行っていってほしい。さらに、関係機関や保護者との連携を大事に取り組み精度を高めていってほしい。

（2）学習活動
・「三木特ともに伸びようの会」は、とても素晴らしい取組だ。まだ市内の人数は少ないとのことだが、今後、啓発に努めて継続していってほしい。
・ICTの活用はとても大切だ。Wi-Fi等の充実も行っている点についても評価できる。今後、さらにiPad数も充実の方向なので進めていってほしい。各家庭のタブレットの持ち込みも柔軟に対応していってほしい。
・コミュニケーションツールが一人一人違う場合は、子どもたちの将来を考えると、ある程度絞って、将来も使えるようにしていくとよい。現在は「えこみゅ」を中心に使っている。過去には、使っていたツールが事業所では使えないというようなことがあった。将来を見通して取り組んでいくこと大切だ。事業所や市内の特別支援学級への共通認識をお願いしたい。ツールが変わると、本人がパニックを起こすこともあり、大きな支障となる。
・特別支援学級の保護者の方は、いろいろな情報をほしいと思っておられるので、そうした情報の公開は、とても重要なことだ。学校の教職員にも、保護者にも、将来ツールの確立をお願いしたい。
・コミュニケーションをどうとっていくか課題である。コミュニケーションをうまくとれれば、例えば、初めての人同士でも一緒にハイキングにいけるという事例もあった。
・特別支援学級の教員との研修会の場で、具体的に、共通理解を図ることが大事だ。サポートファイルや、個別の指導計画、教育支援計画にも、コミュニケーションの支援ツール等を明記して引き継いでいくことが重要だ。一人一人に適した方法で、コミュニケーションをとれること大切だ。

（3）道徳・人権教育
・教職員の取組の報告で、指導の中での生の声が出ている。とても好感が持てる。今後も継続していってほしい。
・子どもたちの主体性や個性をいかして、充実した学校行事を行う中で、多くの人とのふれ合いを行い、その中で、うれしさや達成感を味わうという現在の取組を、さらに充実していってほしい。

（4）交流及び共同学習
・居住地校交流については、引き続き、相手校との綿密な打合せを行い、充実した交流に努めてほしい。コロナ禍も明けたので、今後、さらなる取組を期待する。三木特別支援学校も小中学校もお互いに大切な活動の場であるので、うまく連携をとるようにお願いしたい。
・子ども同士の自然な交流となるように、継続して取り組むことが重要になる。これまでの交流で培った成果をいかしていってほしい。

（5）学校行事
・評価の取組状況や保護者アンケートで明らかになった課題に対して、その改善の方策が書かれている。一連のつながりが分かりやすく、評価できると考える。
・学習発表会やフェスティバルにおいて、その発表内容は、とても工夫されている。子ども一人一人の個性に合わせた、良さがでる表現となっていた。コロナの時期は、行事をできるだけ短時間で人数も絞ってという形だったが、その後の形として、大切な部分を精選していると感じる内容のあるものだった。ツールを使ってコミュニケーションすることをさらに進めていけばよい。
・行事とともに、普段からの情報公開もとても大切だ。
・「お店屋さん」の活動がオープンスクール時になったので、ゆっくりと見れて、とても良かった。子どもたちにとってもよかったのではないか。

（6）家庭・地域との連携　地域における特別支援教育のセンター的な機能の発揮
・今年度から始まった「将来を考える座談会」のおかげで、事業所やグループホームの見学が増えた。将来に向けて何が必要かが分かる機会となった。1つ1つ助言をしてもらいたい保護者も多いと考える。まずは、学校の教員とのコミュニケーションをしっかりとることが大事だ。トイレの仕方が、学校と家で違えば子どもは混乱するので、そこも合わせること大事だ。介助の仕方を共通認識することが大事。お互いに寄り添うことが大事になってくる。不安をもっている保護者も多い。連絡帳やタブレットでの保護者と教員との情報交換も大事だ。LineなどのSNSの活用も考えられるのではないか。一緒にできるようになったことを喜びあえること大切だ。
・コミュニケーション等のツールもかなり進化している。事業所で、研究目的でiPadを使った例があった。とても効果があった。神戸市でもiPadの導入を進めているようだ。高等部との連携も大事だ。共通理解できていないと支障もでてくる。
・発信を受ける側の意識の高さではなく、質の高い内容を発信していくことが重要である。
・高等部では、教員の数が少ないようだ。今の課題に向かって、力をしっかりつけてほしい。
・コロナ禍等で情報が少なくなっている。分からないことは、障害福祉課に連絡して聞いてほしい。
・アプリを活用して、保護者や子どもとの連絡を取るのもよい。実際に活動につながった例もある。生涯ツールの確立はとても大事だ。保護者と子どもでうまくいかないことも、教員の言葉で活動につながることもある。
・放課後等デイサービスと家庭、学校が円滑に共通理解できるツールがあればよい。体調不良の連絡など、さらにうまく連携してほしい。

（7）健康・安全指導
・保護者アンケートと教職員アンケートでは、A評価の割合に開きがある。意識のずれがあるかもしれないので、さらに、取組を知らせていく必要がある。
・福祉避難所への理解は少ない。知らない家庭も多いと考えるので、今後の伝え方が大事になってくる。
・緊急時の対応は、とても重要だ。今年度の取組のように、切迫した状況を設定し、研修するの大事だ。救急搬送の想定も行い、実践を継続することが大事になってくる。実際にやることで課題も見つかってくる。そこで対応を考えていくこと大事だ。緊急時は、待ち時間がとても長く感じるものだ。
・精愛園の栄養士が作った食育カルタを活用するのがよい。数も100ちょっとあるので借りることは容易だ。とても分かりやすい。
・将来、働く時に向けて、精愛園へ体験活動に来てほしい。「トライやる・ウィーク」のような形でも可能である。

（8）施設管理・教育環境整備
・人員不足はあるものの、その中で工夫して指導してることがうかがえる。安全面、指導面でもそうである。
・人数の問題も指導スキルの問題も、今後も継続して取り組んでほしい。超過勤務も減らそうという方向なので、両立がが難しい。何か新しいことに積極的に取り組んでいくような職場環境を作っていってほしい。自由な発想で取り組んでほしい。過去においても、いろいろな工夫した指導や教材開発を行っていた教員の方が多かった。